

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo.18 (2014年4月号) ◆

新緑の美しい頃となりました。新年度も始まり、いかがお過ごしでしょうか。今月 25 日には『Intelligence』14 号が刊行される運びとなり、皆さまのお手元へ届けられる予定です。また、26 日の本研究会の際にもご覧いただけます。このニュースレターとともに、「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> とあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【第 83 回 20 世紀メディア研究会】（3 月 29 日（土）午後 2 時半～5 時半）

・中生勝美「ミシガン大学の日本研究」は、米国における日本研究が、太平洋戦争の開始を契機に、戦時情報局（OWI）や戦略事務局（OSS）に招かれた人類学者などによって推進されたが、ミシガン大学もその拠点の一つで、1942 年に陸軍日本語学校が置かれて以降、日本人類学プロジェクトに巨額予算が投じられ、また柳田国男と親交があった地理学者ロバート・ホールの戦時中の動向も注目されること、また 1947 年にはミシガン大学日本研究所が岡山に設立された経緯についても論じて下さいました。

・押田信子「慰問娯楽雑誌というメディア—海軍省監修『戦線文庫』創刊号の特殊性—」は、1938 年に創刊され 1945 年まで発行された、海軍省恤兵係が監修した、前線の兵士に向けた慰問雑誌について、日本出版社に所蔵されていた原資料全 58 冊に基づき、その創刊の背景や、刊行組織の変遷、紙面内容の変化などを概説して下さいました。

・有馬哲夫「ヤルタ会議情報は遺漏していたか」は、ネットで閲覧できるようになった米国外交文書（FRUS）に基づいて、ヤルタ会議の関連文書とその経緯を整理し、連合国側の参戦条件を正確に伝えるような「ヤルタ密約電」のリークはなかったと論じられました。

※ なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●次回の20世紀メディア研究会は、今月4月26日(土)で、永井健太郎さん、上村陽子さん、及び土屋礼子が報告の予定です。その後は、6月28日(土)、9月27日(土)を予定しております。なお、5月31日(土)と7月は26日(土)に諜報研究会を開催予定です。また、ご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【気になる新著紹介】[敬称略]

竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編著『日本の論壇雑誌—教養メディアの盛衰』(創元社)は、『文藝春秋』や『婦人公論』『世界』『暮らしの手帖』などを取り上げ、戦後民主主義を支えてきた総合雑誌による中間文化世界を論じた書。Linda Risso, *Propaganda and Intelligence in the Cold War*, Routledge は、NATO Information Service (NATIS) を論じた研究書。Hans Harder/Barbara Mittler, *Asian Punches*, Springer は、英国生まれの風刺画雑誌『パンチ』が、インドやエジプトや日本などでどのような類似の風刺画雑誌を生み出していったかという研究書。特に中国で出された『上海パック』の研究が興味深い。

【コラム】

3月にロンドンで、ロイター通信として有名な、トムソン・ロイター社のアーカイブに行ってきた。本社はロンドンの東にある再開発地区に立つしゃれたオフィス・ビルだが、アーカイブはそこから車で10分ぐらい離れた古い石造りの倉庫の一隅にあり、全く別の世界。書類箱が詰まった埃っぽい部屋の一隅に机と電話があり、閲覧できるスペースが一人分だけ。しかし、資料はかなり自由に見ることができ、ロイター社に勤務した人で、すでに亡くなった人のファイルは見ることもできたし、デジカメ写真も撮影できた。ロンドンには他に、タイムズ社など新聞社のアーカイブスも研究者に開かれている。日本でも大手新聞社は、内部資料でも一定期間を過ぎたものは、公共的財産として開示し、アーカイブとして内外の研究者に利用できるようにするべきだと思う。それが近代日本の歴史を記録してきた大手メディアの役割だと思うが、いかがだろうか。

[4月17日付文責：土屋礼子]